十野謙全集

第十一巻

Ⓢ 新潮社版

印　刷／昭和五十年　五　月二十日
発　行／昭和五十年　五　月二十五日

平野謙全集　第九巻

著　者／平野謙
発行者／佐藤亮一
発行所／株式会社新潮社　郵便番号一六二　東京都新宿区
矢来町七一　電話東京二六六－五一一一（業務）
二六六－五四一一（編集）　振替東京四－八〇八
印刷所／塚田印刷株式会社
製本所／神田加藤製本株式会社
定　価／三〇〇〇円

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付
下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

© Ken Hirano, Printed in Japan 1975

平野謙全集／第十一巻■目次

文藝時評Ⅱ

昭和三十七年……6
昭和三十八年……72
昭和三十九年……135
昭和四十年……201
昭和四十一年……267
昭和四十二年……332
昭和四十三年……397
後記 460

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

平野謙全集

第十一巻

文藝時評 Ⅱ

昭和三十七年

一月

新日本文学会が昭和三十六年十二月十五日から三日間にわたって十回目の大会をひらいた。敗戦とともに創立された新日本文学会は、今日まで存続するほとんど唯一の民主主義的な文学団体といえる。私もまた新日本文学会の一会員であり、現代文学のゆくてを照らすひとつの光として、その大会の成果にはおのずと注目せずにはいられない。しかし、先月に引きつづき、私は現在も入院加療中であって、大会に出席することはできなかった。新聞の報ずるところによれば「一般活動報告」を中野重治が、「創造活動報告」を野間宏が報告したあと、その報告に基づいて、かなり活発な討論が交された、とある。討論の一焦点は政治と文学の関係に集中されたという。だが、出席できなかった私は、報告についても討論についても、これを論ずる資格がない。ただ私は印刷された報告の草案だけは一読することができ、また、別に野間宏の論文『現代日本文学の問題』(思想)を読むことができた。それについて、私の感想の一端を書きとめておきたいと思う。

野間宏の報告と論文とは、おのずから性質を異にするものである。前者はおそらく大会準備委員会の手によって十分検討され、補足されたものであり、後者は純然たる野間宏個人の一論文にほかならない。ことに後者は堀田善衛の『海鳴りの底から』の批評を中心としたものだから、その規模においても性質においても、前者と同一視することはできない。しかし、当然のことながら、そこには共通した発想もとらえることができる。それは現代文学の展望を安保反対闘争という時点を通過したものとして把握しようとする志向において、またその現代文学は「日本近代文学」の理念崩壊の上にたつものとしてイメージされている点で、ほとんど共通している。『海鳴りの底から』はそういう現代小説の一典型として評価されている。

野間宏は「このような〈堀田善衛の〉方法は、安保反対闘争以後一つの確固とした有効な方法となることを求めて

創造されようとしている」と書いている。また「日本の文学も、この安保反対闘争に触発されて、いろいろな局面を展開しているが、堀田善衛の『海鳴りの底から』は最も深くそれに触発されたものと考えられる」とも書いている。

私はこういう評価に賛成しがたい。安保反対闘争がいかに現代日本の大事件であったろうと、それと『海鳴りの底から』のモティーフとを直接に結びつけようとする発想に、私は反対である。『海鳴りの底から』にちらばっている作者の感想をみれば、作者が島原の乱に関心したのがいかに古いことであり、安保反対闘争に直接触発されたものでないことは明らかである。作者個人に即していえば『記念碑』その他の現代史に取材した長篇から『鬼無鬼島』のような歴史小説に出ていったコース、そこから『海鳴りの底から』に到達したコースは、直接には安保反対闘争とは無関係のはずだ。このことは、堀田善衛という一現代作家が『海鳴りの底から』にまで到達した作家のコースと、戦後日本が十五年たって安保反対闘争にまで結果した社会全体のコースとが全然無縁だなどということを意味しない。ただ野間宏のいうように直接的でもなければ、無媒介的でもないというまでである。それが直接的でもなければ無媒介的でもないというささやかな一事に、文学創造の困難もあれば文学批評の困難も存するのである。

これは単純なイロハだが、このイロハは、たとえば堀田善衛自身にもまだ体得されていないかにみえる。『海鳴りの底から』にばらまかれているプロムナードと称する作者の感想などは、その証しだろう。作者の楽屋裏をのぞかせたそれらの感想が、感想としてどんなに卓抜なものであろうと、それは文学創造の困難を回避した作者自身の眼高手低を弁明しているにすぎない。それは方法意識などという高級なものではあるまい。

野間宏は『海鳴りの底から』が週刊誌に発表されたことも高く評価しているが、これも近視眼的な見方にすぎない。明らかに『海鳴りの底から』は週刊誌発表という制約から遁れきっていない。それは野間宏自身の『わが塔はそこに立つ』とくらべてみれば明白だろう。週刊誌と文藝雑誌という発表機関の相異は、その枚数や締切りの点において、やはり作全体の深まりを物理的に制限している。プロムナードという作者の感想なども、おそらくその制約から遁れるための作者の苦肉の策にすぎまい。

私のいいたいことはこうだ。現代文学の運命をすぐ安保反対闘争などと結びつけることで、なにごとかを解明したと錯覚するな、ましてそれが週刊誌に発表されたからといって、マス・コミのつくりだした読者大衆の網の目をやぶったなどという子供っぽいことをいいだすな、ということ

である。文学創造の困難も、文学批評の困難も、もうすこし深いところに横たわっている。それがもっと深部の問題だという一点に「政治と文学」の新しい関係も逆照明されるはずではないか。そういう本質的な差別をぬきにして、どうして政治と文学との統一などが提起されよう。

このことが「崩壊に直面しようとしている日本近代文学に代る新しい日本文学の創造の目標」などという「清算主義的」な言葉を安易につづらせる一因をなしている。「日本近代文学」という用語は、私の知るかぎり、小田切秀雄が戦後はじめてつかいだしたものだと思うが、私はきらいである。私はむかしどおりに近代日本文学、現代日本文学と書きならわしているが、その境目を私は私なりに有島武郎の『宣言一つ』あたりにおいている。これは異論のあるところにしろ、野間宏の報告のように「日本近代文学」を現代日本文学と同義的につかう用法はやはり疑問である。私は一時評家として「純文学」意識の固定とか変質という問題を提出したが、それはあくまでも現代日本文学の一現象としていいだしたのであって、それを近代日本文学全体に拡大する気ははじめからなかった。そういう私にとって、現在「日本近代文学」が崩壊に直面しているとか、それにかわる文学創造の目標を安保反対闘争以後の時点におくとかいわれると、やはり戸惑うのである。私にはそれが近代文学の全否定みたいに受取れて、ひっかからずにいられぬのである。

野間宏の報告も論文も、私の難ぐせつけたところは、いわば序論みたいな個所で、それだけで全体を推すことははばかられるにしても、現代文学と安保反対闘争の直結や「日本近代文学」の全否定などから「政治と文学」の関係を新しく見なおされては、すこし心もとない気がする。野間報告の最後に、今後のプログラムとして「崩壊に直面しようとしている日本近代文学に代る新しい日本文学の創造」「崩壊に直面しようとしている日本近代文学の崩壊にともなうあらゆる事態を正確にとらえ、そこにすでに見られる新しい日本文学創造の基礎を見出すこと」「政治と文学の新しい関係を広汎にひろがった文学者の政治参加を通じてさぐり、アメリカ帝国主義、日本独占資本により急速に強化される支配体制反対の運動に文学者の立場にたって積極的に参加する」という三つのスローガンが掲げられてあるが、一九六二年以後の現代文学のゆくてを照らすべきこのプログラムが、全体の総括としてヴィヴィッドに生きかえっていないのも、そういう点と関係があるだろう。

しかし、もとより私は高見順のように近代日本文学と純文学とを同一視し、いわばその全肯定に立った夜郎自大的な立言をうべなうものではない。

高見順の『純文学攻撃への抗議』（群像）はみかけだおしの論である。山路愛山、竹越三叉、赤木桁平など文学史上の「純文学」攻撃者を恣意的に引きあいに出して、私を最も悪質な「純文学」攻撃者に見立てたものである。せめて高山樗牛の社会小説論なり時代精神論でも立ち合わせたら、もうすこしミのある論になったろうと惜しまれる。愛山、三叉、桁平をひっぱり出すくらいなら、私自身をも功利主義的批評家に仕立てねば論の道すじとしておさまらぬはずなのに、高見順にはそれができない。なんのために愛山らを引きあいに出したのか、ムダ骨折ったものである。みかけだおしの論と呼ぶ所以だが、なぜ高見順が私を功利主義的批評家に見立てそこなったかは明らかである。私自身の提言のほんの一部分にしか、高見順はふれることができないからだ。

現に、佐伯彰一は私の提言をほぼ正解した上で、これを「文学の〃功利性〃の回復」（文学界）と結論づけている。それが論のポイントなのに、そこへ高見順は踏みこむことができない。なぜ踏みこめないかといえば、佐伯彰一とちがって、みずから参加者のひとりであった昭和初年代のプロレタリア文学運動に対する高見順自身の史的評価がさだまっていないからだろう。そこで苦労して遠巻きにしただけで、私を最も悪質な裏切りものに見立てるしかテがなかったのだろう。

このきめつけも大時代なものだ。まさか高見順が知らぬはずはないと思うが、こういうきめつけはレーニンがカウツキイを背教者扱いしてからの旧左翼の常套句であって、ことにスターリン治下の悪名たかい社会ファシズム論以後の紋切り型にほかならない。いまどきこんな古証文じみた発想を援用しなければならぬとは、チエ者をもって鳴る高見順のいいぐさとも思えない。最近はコミンテルンの研究などについてもいい本が出版されているようだ。あなた自身のかけがえのない青春期の旧左翼時代のためにも、もう一度昭和初年代の革命運動の歴史を勉強しなおすことをおすすめしたい。それからゆっくり論争しても遅くはないでしょう。

今月は正月号らしく力作がおおくて、病院暮しの身の上では読むのになかなか難渋した。いい意味でもわるい意味でも、最も読みでのあったのは、福永武彦の百六十四枚の『告別』（群像）である。故原田義人をモデルにしたらしくも思えたが、私はそういうモデル興味ぬきに読むことができた。構成は例によってなかなかこったもので、ナレータアの「私」と主人公の音楽批評家との描写を交互に組み合わせたり、主人公の心理表白を片カナであらわしたり、構成全体を事件の時間的継起に従わせなかったりして、工夫

をころしている。よく考えぬかれた作といえるが、外遊中のドイツ女との恋愛、その結果による家庭破壊と主人公の娘の自殺という劇的事件の設定には、やはりブランクがある。私は事件の一部始終を描けというのではない。ただ主人公の細君の受けた打撃の程度がよくわからない、といいたいのである。描かれたかぎりでは、良人の恋愛と娘の自殺という事件の前も後も、細君は一貫して気のきかぬお人好しみたいにしか受取れぬが、そういうものではなかろう。その空白を目だたせぬために、作者はいろいろ構成上の工夫をこらした、といえぬこともない。作者の同情は圧倒的に主人公側にある。藝術という出世間的なものにつかれたインテリの主人公をよく理解できぬ細君と、その母親という『蒲団』以来の設定自体は、それでかまわぬとしても、だから、細君をデクの坊みたいに扱ってもいい権利は、作者にも与えられていないはずだ。つまり、この作品はやはり全体として小ギレイすぎるのである。

反対に、丹羽文雄の二百枚の『有情』(新潮)は、たかがアメリカに遊学させた息子の恋愛沙汰に衝撃された父親の自己反省としては、深刻めかしすぎ、泥んこになりすぎるといえよう。これは現代の流行作家の生活水準と生活意識を示すにたる好個の滑稽小説の題材だが、作者は大真面目に親鸞などを持ち出すことによって、折角の題材をころしてしまった。作者は小説家の真諦として他人の身になって考えるということをあげているが、それと同時に、小説家たるものは、本人にとってどんな深刻らしい事態でも、ひろい世間に出したら滑稽にしかうつらないというくらいの社会的な眼を養う必要もあるだろう。

しかし、それはそれとして、作者の両親に関する叙述は、やはり考えさせるものを持っている。無意識的にか、作者は母親のことと父親のことを並列的にしか書いていないが、祖母と入り婿たる父親との不倫が生母の家出をもたらしたという乱脈な家族関係は、そうざらにころがっているものではない。これを立体的に描けば、それだけでゆうに一個の長篇となると思われるが、私が知らぬだけで、作者はとっくに長篇に書いているにちがいない。そういう特異な父母と現世ふうな外国遊学の息子の恋愛沙汰との題材としてのアンバランスにこの練達の作者が気づいていないらしいのは不思議である。

それにしても今月は作者の両親に取材した私小説ふうの作品が妙に目についた。伊藤整の『母の記憶』(世界)、中山義秀の『故里の土』(群像)、上林暁の『生家にて』(新潮)、三浦哲郎の『三つの形見』(文学界)などがそれである。なかでは、事実を事実としていわば鷗外ふうに書いた伊藤整の作が私には印象的だった。十二人の子供を生んだ母親の

こと、その母親と結婚する前に一度唖の娘の家に入り婿したらしい父親のことなどを簡潔に書きしるした作者の客観的な筆致は、かえっていろんな人間の生涯を空想させるにたる。なるほど、伊藤さんのご両親はこういう人となりだったか、と読者を頷かせるものを持っている。ついでにいえば、明治三十年代から明治四十年代にかけての二葉亭四迷、啄木、藤村、漱石などの月給について、はじめて言及したのは中野重治だが、軍医総監としての森鷗外の月給高を推定したのはこの作品がはじめてだろう。

ほかに力作としては舟橋聖一がそれぞれ百枚の『山霧の遠景』(群像)と『悪事』(新潮)を発表している。どちらもうまい小説だが、私は『ある女の遠景』の後篇をなす前者の方をとりたい。うまい小説といえば、三島由紀夫の『魔法瓶』(文藝春秋)なども数えあげねばなるまい。おそらくこれらの作品が現在の小説技術の水準を示すものだろう。また『群猿図』『狐草紙』以来の花田清輝の歴史小説『みみずく大名』(群像)が三部作として完結したことを書きしるしておきたい。

しかし、今月いちばん批評しにくくて、しかも印象ふかかった作は島尾敏雄の『島へ』(文学界)だった。作者自身の初期の夢物語みたいな奇怪な系列のものらしいが、夏目漱石の『夢十夜』や内田百閒の初期作品などの系列にくらべれば、さすがにもっと現代的であり、男のコキュぶりなども堂に入ったものである。女の会話のヘンな生々しさなどもこの作者ならでは書けぬものだろう。

《新日本文学》には中薗英助、泉大八、墉作楽、古田芳生らの短篇が掲載されているが、みな感服しなかった。古田芳生の『おとといのこと』がいちばんていねいな仕事ぶりだが、題名どおり、石川淳が『焼跡のイエス』を書いたころに似つかわしい作品である。しかし、これらの作に共通している戦中、戦後の戦争体験を読みかえして、いまさら日本人の戦争体験の行方について考えなおしてみる気になった。

二月

この時評は、たとえば二月号の雑誌小説の読後感なら、おそくも一月中の紙面に掲載されるのが建て前である。私もどうやらその建て前だけは守ってきたつもりだが、今月はその建て前を放棄せざるを得なかった。もっぱら私の肉体的条件によるものだが、最初にそのことを読者諸君におわびしておきたい。

今月は大江健三郎の『遅れてきた青年』(新潮・三十五年九月—三十七年二月)と石原慎太郎の『日本零年』(文学界・

三十五年一月―三十七年二月）の二長篇が完結した。この野心的な長篇を読みおえるのに、私がスタミナを消耗したのは事実だが、そういう時評家の愚痴をまくらにふるのはもうやめよう。ただ私が困惑したのは、この二長篇をうまく批評しきるおぼえがない、ということである。読みにくさという点では、たとえば野間宏の『わが塔はそこに立つ』にくらべれば、二篇とも比較にならぬくらい読みやすかった。しかし、野間宏の長篇はなんとか私なりに批評しきるおぼえもあったが、この二長篇にはしりごみせざるを得ない。大江健三郎の作品からは、大江好みの言葉づかいにならえば、最初はむりやり強姦されたような印象を受けたが、やはりオルガスムスがないわけではなかった。石原慎太郎の作品からは、壮麗な外国映画を息もつかずに見とれているような印象を受けたが、パッと電気がついてみると、みみっちい日本人の観客にはさまれたおなじ日本人の私自身を発見して、なんともテレくさい感じを否めなかったのである。

ここから私は「純文学変質説」を一席ぶてばぶてる気がせぬでもなかったが、ぶつにしろ、ぶたぬにしろ、私のイメージする純文学概念といささかかけはなれているので、かえって話のつぎ穂に困却してしまう。二作とも現代の政治機構という怪物に体当りしている点では共通しており、そこから私は現代小説のアクチュアリティという絶好の話題を引きだすこともできるはずなのに、いくらなんでもこんなことがあろうはずはない、という私の古びた常識が、その話題にとびつくのをひるませてしまう。文体の問題などをぬきにしても、そういえると思う。

『遅れてきた青年』は、一部と二部とにわかれていて、二部の最初の部分までは、私は作者に「強姦」されているような気がするだけだった。この作者の初期のいくつかの秀作をなぞりながら、しかし、もはや作者は初期のみずみずしい情感を喪失してしまっている、と思わずにいられなかった。みずみずしい情感のかわりに、観念でよろわれた甲高い叫びだけがむきだされている。私は終始作者の招待してくれるはずの世界になじめなかったのである。

しかし、二部のなかごろから、私は「強姦」されているばかりでもない気がしてきた。この長篇の主人公は八月十五日のとき、まだ田舎の小学生だったが、敗戦とともに「遅れて」しまった自分にふかい喪失感を感ずるような少年である。『飼育』や『芽むしり仔撃ち』とほぼおなじ環境のなかで、少年は朝鮮人の友だちとともに、反乱のアジビラに「遅れ」をとりもどそうとして、武器をとって参加する。無論、少年はすぐ捕えられ、感化院にぶちこまれる。第一部はここに終るのだが、この第一部はうきあがった作

者の叫びばかりが耳について、全然作品世界にひきこまれなかった。時評の義務さえなければ、私は第一部のなかばで通読を放棄しただろう。

第二部はそれから十数年たって、現代のジュリアン・ソレルを決意した東大生の主人公が、アルバイトとして保守政党のボスの娘にフランス語を教えながら、一友人のすすめで学内のトロツキスト的団体に参加するところからはじまる。ここでも作者は旧作『偽証の時』とほぼひとしい状況に主人公を突きおとす。スパイ容疑のために同志から無慙な拷問を受けた主人公は、復讐と人間復権のために、家庭教師の娘の父親と組んで国会の文教委員会で拷問の顚末を暴露する。

このあたりから、私は私なりに作品世界にひきこまれるのをひそかに感じたのである。しかし、変質者の浮浪人をつれてきて、手足をしばった主人公を凌辱させるというような拷問形式が、果して事実問題として可能か。その浮浪者をトロツキスト団の学生が、どんな方法で現場にまでつれてくることができたか。また、衆人環視のなかで、いかに変質的な浮浪者とはいえ、手足をしばられた男に欲情を感ずるものかどうか。その辺の消息を作者がもっと巧みに語ってくれないかぎり、読者は半信半疑の状態からぬけだすことができない。

文教委員会で一応「勝利」した主人公は、こんどは保守党代議士の細君をスポンサアとして、テレビ・タレントとして進出することになるのだが、その第一回の番組があまりに露骨な都知事選挙めあての企劃だったため、ついに主人公はその番組を放棄し、代議士と絶縁する。ここで肝腎なことは、代議士の方でどんな実際的な打撃を受けたか、ということだが、その点については、作者は口を緘して語らない。つまり、ここには作者の「想像力」ではなく、一種の妄想による現代ふうの状況やら風俗やらが最大限に動員されていて、読者は自分の現実感覚をぬきにすれば、作者の特異な発想に一応ひきこまれていくものの、気がつけば、やはりいやらしい作者の身ぶりに「強姦」されている感じをぬぐいさるまでにはいたらぬのである。いくらなんでも、政治のカラクリがこんな低劣なものであるはずがない、と思いなおさずにはいられぬのである。

作者の語りたいことは、現代のような政治的状況における人間復権の絶望的困難と、その困難のまんなかに身を挺した主人公の苦闘という点だろうが、そして、私は作者の野心的なテーマを認めるのにやぶさかではないつもりだが、果して作者は主人公のおかれた絶望的困難の状況に本心から身につまされているか、といえば、私はノウといいたい衝動を抑えがたいのである。作者は自己の文学的妄想に舌

なめずりしているだけではないか。しかし、私にはそうハッキリ断定するだけの自信がない。常識では考えられない事件や状況が、現に私どもの周囲にはうずまいているようだ。ただそれを文学的リアリティにまで高めることの困難に、作者はどこまで直面したか、について、私は懐疑的であるにすぎない。

ほぼおなじことが石原慎太郎の『日本零年』についてもいえるかと思う。作柄からいえば、これは大江健三郎の長篇よりずっと抵抗すくなく読了することができた。「原子動力機関」をアメリカから買いつける政治的内幕をタテ糸として、旧共産党員の政治記者、少壮実業家、ニヒリスティックな美貌のピアニスト、原子力研究所の若い優秀な学者、商売に徹底する政治ブローカアなどの諸人物が入り乱れてかもす人間劇は、最後までおもしろく読めた。おそらくここには作者自身の文学的成長も定著されている、といえるだろう。しかし、にぎやかな国際的舞台を背景とするこの人間劇あるいは政治劇が、結局むかしながらのメロドラマにすぎないことに、読後しばらくして、読者は気づかざるを得ないのである。アメリカからの「原動機」買いつけの政治的カラクリを完了するために、原子力研究所の一所員を五百万円で買収して、その実験装置に事故を起させ、その結果、放射能を浴びた有能な学者が発明の完成途上で病死する、という筋立ては、いくらなんでも現実には起りそうもない。しかし、それをハッキリ否定する根拠も読者にはない。こういう曖昧な場所に立たされることが、時評家としてはいちばん困るのである。

石原慎太郎の『日本零年』を読む前に、私は荒正人にすすめられてC・P・スノウの『科学と政治』という本を一読した。第二次世界大戦におけるイギリスの科学と政治の連関を、二人の科学行政官の確執を中心に語ったもので、ほんのひとにぎりの委員会がボタンひとつ押せば、レーダア発明の促進とか戦略爆撃の可否とかが決定される政治機構のありかたを批判した本である。スノウは密室の政治と公開の政治との二重構造を批判することにポイントをおいているようだが、『日本零年』と読みくらべて、もしも日本の科学行政に石原慎太郎の描いたようなスキャンダルの十分の一でも実在するとしたら、と思って、私は彼我の政治機構のありかたの本質的な相異に、ほとんど絶望的になった。しかし、石原慎太郎はそういう日本独特の政治機構については、あんまり懐疑的でないようにみえる。そのオプティミスティックな作者の姿勢が、『日本零年』の印象をメロドラマめかしている根本の原因ではないかとも考えたが、これも一私見にすぎない。

ただ私に確言できることは、大江健三郎にしても石原慎

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com